

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Rhetorical Function of Children's Speech at Home : Examination from the Viewpoint of De-contextualization

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2020-02-06<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 田中, 弥生, 小磯, 花絵<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15084/00002559">https://doi.org/10.15084/00002559</a>                          |

## 家庭での幼児の発話の修辞機能 —脱文脈化の観点からの検討—

田中 弥生 (国立国語研究所 音声言語研究領域・神奈川大学 外国語学部) †

小磯 花絵 (国立国語研究所 音声言語研究領域)

### Rhetorical Function of Children's Speech at Home : Examination from the Viewpoint of De-contextualization

Yayoi Tanaka (National Institute for Japanese Language and Linguistics, Kanagawa University)

Hanae Koiso (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

#### 要旨

本研究は、幼児の言語コミュニケーションに関して、脱文脈化の観点から検討するものである。ここで脱文脈化とは、コミュニケーションが行われている時空と、その発話内容との、時間的・空間的距離の程度のことをさす。本発表では、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」において現在構築中の「日本語日常会話コーパス」モニター公開版データの中から、幼児と両親の自宅での食事場面での会話を分析の対象とし、幼児の発話について言語表現から修辞機能を特定し、親とのやりとりで幼児がどのように発話を展開させるか、脱文脈化の観点からの検討を行った。その結果、食事場面であるため、食事の話題や食卓に置いてあるものについての脱文脈化程度の低い修辞機能が多く使われるが、両親の発話をきっかけとして幼児も脱文脈化程度の高い修辞機能を使用していることがあきらかになった。

#### 1. はじめに

筆者らは、これまでにない談話分析の観点として、修辞機能および脱文脈化程度を用いる研究を進めている。脱文脈化程度とは、コミュニケーションが行われている時空と、その発話内容との、時間的・空間的距離の程度のことをさす。

岩田 (1995) によると、教室授業では情報の“脱文脈化”と“文脈化”という二つの知的作業を子どもたちに課しているという (岩田 1995 : 33)。また、学校における児童の発達に関して、「学校では、その多くの学びが、実生活の状況とは切り離され、脱文脈化された概念的な知識の獲得にむけられる。日常の生活文脈に密着した状況的な思考から、日常の生活文脈から切り離された、抽象的で無性格的な思考に慣れることが重要な課題となるのである」 (岩田 1995 : 33) と述べている。

分析には、Systemic Functional Theory (選択体系機能言語理論) の枠組みの談話分析手法の一つである Rhetorical Unit Analysis (修辞ユニット分析, 以下 RUA) (Cloran 1994, 1995, 1999) について、佐野・小磯 (2011) によって日本語に適用されたものを用いる。テキスト内のメッセージ (おおむね節) 単位で修辞機能を特定し、脱文脈化程度が高い表現か、低い表現か、すなわち事象が一般的なこととして表現されているか個人的なこととして表現されているか、その場とは直接関係ないことかその場のことを示すことができる。

---

† yayoi@ninjal.ac.jp

田中(2018)では、子供の書き言葉の分析として、同一のテーマで書かれた小2と中2の作文を分析し、成長とともに様々な脱文脈化程度の修辞機能を使用できるようになる様子や、教員の評価と脱文脈化程度の連関がうかがえることを示した。書き言葉の分析は小学生以上が対象になるが、話し言葉であれば幼児から対象にすることが可能である。上述の岩田(1995)の述べるように、脱文脈化された概念が学校での学びで獲得されるとすれば、就学前の幼児にとって、その場の状況から離れた脱文脈化された発話は、必ずしも容易ではないことが伺える。

幼児の会話について、語彙分析(高櫻 2008, 森山他 2012 など)や、発話機能の分析による会話展開の検討(小坂 2001)など、様々な観点から研究が行われているが、幼児の会話に関する脱文脈化の観点からの分析は管見の限り行われていない。

筆者らが関わるプロジェクトで構築中の「日本語日常会話コーパス」(Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC)には子供の会話も含まれている。今後、就学前の子供から小学生や中学生の子供の話し言葉の特徴を、修辞機能と脱文脈化の観点から明らかにすることを長期的な目標として掲げるが、今回はそのうち、就学前の子供のデータを対象にケーススタディを行う。具体的には、就学前の子供の家庭での両親との食事場面をとりあげる。食事は、家庭の中で日常的に行われるものである。徳永他(2016)は、成人の食事場面の会話について、話すことと食べることが同時進行するため、他者とのコミュニケーションを維持するための社会的な振舞いと、摂食という自己的な振る舞いが存在するとしている。香宗我部他(2015)は、幼児期の子どものいる家族と一緒に食事をするコミュニケーションの意味として、「家族の関係性構築と人間性、社会性の形成の二重の効果、文化や道徳観の伝承の2つの意味があることを示唆」(香宗我部他 2015:170)している。

食事を摂るといって自分自身の本能的な行いが主となる場面では、主に目の前の食事について述べるという文脈化された発話、すなわち脱文脈化程度の低い修辞機能が用いられることが多いことが予想される。本発表では、食事時の幼児によってどのような修辞機能が用いられ、脱文脈化程度の高い修辞機能はどのような時に発生するかについて、確認していく。

以下、2. でデータと分析方法を述べ、3. で分析結果の報告と考察を行い、4. でまとめと今後の課題について述べる。

## 2. データと分析

### 2.1 分析対象データ

本研究の分析対象として、現在国立国語研究所で構築中の「日本語日常会話コーパス」(Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC)のうち2018年12月に公開したモニター版(小磯 2019)の中から、0～4歳の未就学の女兒(カオちゃん<sup>1</sup>)の家庭における両親との3人の夕食場面のデータ(約13分)を用いる。

### 2.2 分析手法

Cloran(1994,1995,1999)によって英語母子会話の分析について提案されたRUAは、テキストの意味単位を特定するための手法(佐野 2010b)で、その過程におけるメッセージ(おおむね節)<sup>2</sup>単位での修辞機能(rhetorical function)及び脱文脈化程度(degree of de-contextualization)

<sup>1</sup> 本コーパスでは個人名は仮名である。

<sup>2</sup> 2.2.1 参照のこと

の特定について、佐野・小磯(2011)によって日本語への適用が行われ、佐野(2010a)が分析手順を提示している。修辞機能と脱文脈化程度は、発話機能(speech function)、中核要素(central entity)、現象定位(event orientation)の認定結果の組み合わせから知ることができ、談話や文章においてどのような修辞機能が用いられているか、使用されている言語表現は脱文脈化程度が高いか低いか(「いま・ここ・わたし」から遠いか近いか)、という観点からの検討が可能になる。

RUA では、1. メッセージとその種類を認定し、2. 発話機能・中核要素・現象定位を認定し、3. 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認を行う。表 1 に示したように、発話機能・中核要素・現象定位の組合せから修辞機能を特定し、脱文脈化指数を確認する。

表 1. 発話行為・中核要素・現象定位からの修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認

|             |           | 発話機能 |       |         |           |          |        |          |          |
|-------------|-----------|------|-------|---------|-----------|----------|--------|----------|----------|
|             |           | 提言   | 命題    |         |           |          |        |          |          |
|             |           |      | 現象定位  |         |           |          |        |          |          |
|             |           |      | 現在    |         | 過去        | 未来       |        | 仮定       |          |
| 非習慣的<br>一時的 | 習慣的<br>恒久 | 意図   | 非意図   |         |           |          |        |          |          |
| 中核要素        | 状況内       | 参加   | [1]行動 | [2]実況   | [7]自己記述   | [3]状況内回想 | [4]計画  | [5]状況内予想 | [6]状況内推測 |
|             | 非参加       |      | n/a   |         | [8]観測     |          | [11]予測 |          |          |
|             | 状況外       | 定言   | [9]報告 | [13]説明  | [10]状況外回想 | [11]予測   | [12]推量 |          |          |
|             | 定言        |      | n/a   | [14]一般化 |           |          |        |          |          |

「n/a」は該当なし／背景が薄い灰色の部分が発話機能の種類/[ ]内は脱文脈化指数  
(佐野 (2010b) および佐野・小磯 (2011) の修辞機能の特定表に脱文脈化指数を合わせて示したもの)

図 1 に、修辞機能と脱文脈化指数をその指数の順番に並べて示す。脱文脈化指数とは、中核要素の here (発話地点との空間的な距離) の程度と現象定位の now (発話時点との時間的な距離) の程度によって、近いものから遠いものまで修辞機能を線上に示した際の順序の指数である。脱文脈化指数[1]は例えば「それ取って。」のような、コミュニケーションが行われているその場面の時間と場所の「今・ここ」に最も近い表現である。一方、脱文脈化指数[14]は、例えば「手とは物をつかむための器官である。」のような、そのコミュニケーションの場面の時間と場所とは直接関わりのない、つまり「今・ここ」から最も遠い表現である。

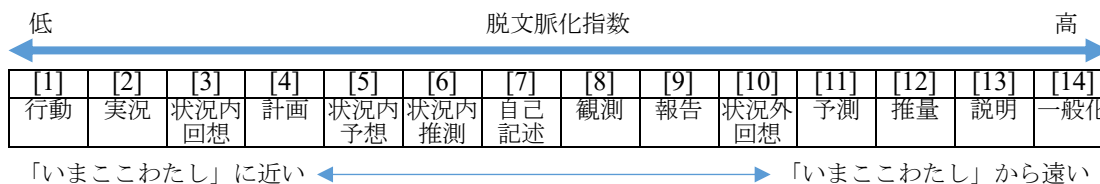


図 1. 修辞機能と脱文脈化指数<sup>3</sup>

以下、分析手順について述べる。

<sup>3</sup> この指数は順序指数である。

### 2.2.1 メッセージの認定

まず、分析対象をメッセージ単位に分割し、種類を認定する。図2にメッセージの種類を示す。メッセージは原則としておおむね節である。主部や述部が省略されていると考えられる場合には、補足して認定する。

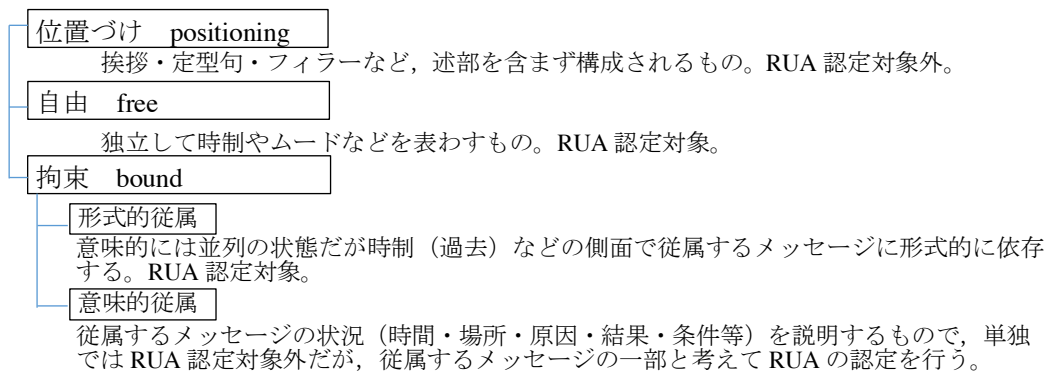


図2 メッセージの種類

「位置づけ」に分類されるのは、「おはよう」や「ありがとうございます」のような挨拶や定型句、フィラーなどである。本研究の分析データでは、(1)(2)などが該当する。「自由」に分類されるのは(3)のような単文や(4)及び(5)の下線の主節部分である。従属節は「拘束」に分類され、その機能から「形式的従属」と「意味的従属」に分けられる。(4)の従属節、「カツ食べて」及び「ご飯食べて お味噌汁も飲むの。」と並列で形式的に従属しているため、形式的従属に分類し、それぞれ RUA の認定を行う。(5)の従属節「ちゃんとご飯食べないと」は、主節「(U<sup>4</sup>ぴっかん)だよ?。」の条件であるため、意味的従属に分類し、単独では認定を行わない。

- (1) いただきます。<sup>5</sup>
- (2) ほら。
- (3) すんごい赤ちゃんトマトがいるよ。
- (4) カツ食べて ご飯食べて お味噌汁も飲むの。
- (5) ちゃんとご飯食べないと(U<sup>4</sup>ぴっかん)だよ?。

### 2.2.2 発話機能の認定

分析対象を確認した後、発話機能の認定を行う。発話機能は、表2に示したように、「提言 proposal」か「命題 proposition」に分類する (Halliday and Matthiessen 2004)。

「提言」は表3の(a)の品物・行為の交換（提供あるいは命令）に関するメッセージで、相手に行動を要求する(6)(7)などが該当する。「提言」のメッセージは、この段階で、修辞機能は「行動」、脱文脈化指数は最も低い[1]と認定される。「命題」は(b)の情報の交換（陳述あるいは質問）に関するメッセージで、情報を提供したり、要求したりする(8)(9)などが該当する。「命題」と分類されたメッセージについては、この後の中核要素と現象定位の認定を

<sup>4</sup> (U)は発話内容が不明瞭なことを示す。

<sup>5</sup> [作例]と記していない例文は、分析対象データからの引用である。

行い、修辞機能と脱文脈化指数を確認する。

表 2 発話機能 (Halliday & Matthiessen 2004: 107)

| role in exchange | commodity exchanged                    |   |
|------------------|--|---|
|                  | (a)goods & service                     | (b)information                            |
| (i)giving        | “offer”<br>would you like this teapot? | “statement”<br>he’s giving her the teapot |
| (ii)demanding    | “command”<br>give me that teapot!      | “question”<br>what is he giving her?      |

提言

命題

- (6) 見せて。
- (7) 牛乳お代わり。
- (8) 新しいおもちゃあった。
- (9) どうしてきょうパパのお箸なん。

### 2.2.3 中核要素の認定

中核要素は、メッセージの中心となるもので、基本的には主語によって表現される。メッセージの内容の中心がコミュニケーションの場面に存在するか否か、場面とは関わらず存在するものか、によって分類し、メッセージの発信者との空間的距離を示す。照応など前後のメッセージを用いて判断する場合もある。中核要素の分類を図3に示す。

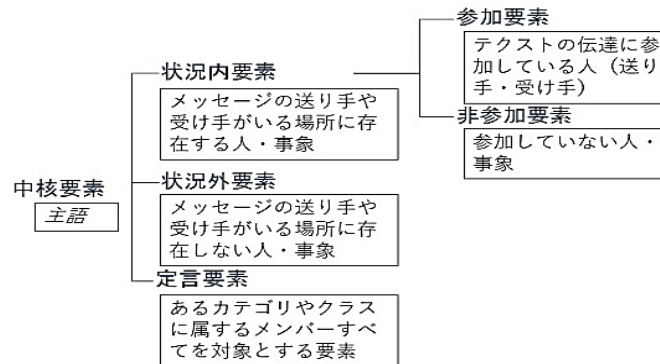
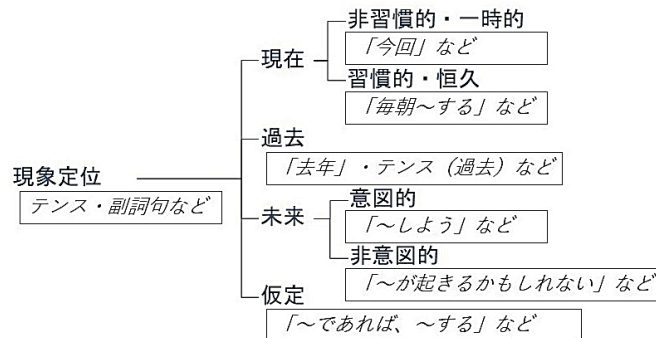


図 3 中核要素の分類(佐野・小磯 2011)

### 2.2.4 現象定位の認定

現象定位は、メッセージの発信時点とその内容との時間的距離を示す要素で、副詞や述部から判断する。メッセージによって表現されている出来事がすでに起こっていることか、まだ起こっていないのかを、メッセージが発信されている時 (Time of speaking) を基準とした



時間的な位置を特定する。現象定位の分類を図4に示す。

### 2.2.5 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認

表1に示したように、発話機能と中核要素と現象定位の組み合わせによって、修辞機能が特定され、脱文脈化指数を確認できる。脱文脈化程度が低いメッセージは、その文脈すなわち話者が存在する時空間の身近なことや具体的なことを述べているのに対し、脱文脈化指数の高いメッセージは、話者の存在する位置から空間的・時間的に離れたことやその場・その瞬間に関わらない抽象的なことや普遍的なことなどを述べている。

## 3. 分析結果と考察

本研究の分析データにおける3人の会話内容の流れを図5、図6に示す。この図では、縦方向に時間軸を設け、上から下へと会話が進んでいる。●が幼児、■は父親、▶は母親である。左端に【話題内容】を示したが、灰色の部分は沈黙を示している。図の左側が脱文脈化程度の低い修辞機能、右側が脱文脈化程度の高い修辞機能である。【話題内容】と修辞機能「行動」脱文脈化指数[1]<sup>6</sup>の間の網掛け部分に付置されている記号は、「そう。」などのようにメッセージの種類が「位置付け」であったり、前後の発話の一部であってメッセージが分割されていたりするなどの理由によって、修辞機能と脱文脈化指数が特定されていない発話を示している。図内の吹き出しには主に幼児の発話内容を示しており、破線の吹き出しは本発表で取り上げる幼児の発話と関わりのある親の発話である。

図5はデータの始まりから10分弱までの部分である。「実況」[2]に集中していて、「行動」[1]、「状況内回想」[3]もたまに使われ、脱文脈化程度が低い発話が多いこと、また、脱文脈化程度が高い方向の、「状況外回想」[10]、「説明」[13]などが使用されているところがあることがわかる。以下に、会話の流れに沿って、修辞機能と脱文脈化程度を確認していく。

この会話の前半でベースとなっているのは、(10)(11)のような母親による食事の仕方についての指示、幼児による食事についての(12)など、脱文脈化程度の低い発話である。

(10) 食べてみて?。【提言 → [1]行動】<sup>7</sup>

(11) ちゃんとお茶碗持ってね?。【提言 → [1]行動】

(12) カツおいしいよ?。【命題, 状況内;非参加, 現在;非習慣・一時的 → [2]実況】

<sup>6</sup> 以下、本文中では修辞機能は「」で示し、脱文脈化指数は[]で示す。

<sup>7</sup> 例文は、【 】内に、発話機能、中核要素、現象定位→[脱文脈化指数]修辞機能を示す。(10)のように発話機能が「提言」の場合には、中核要素と現象定位は認定しないため、記載がない。)



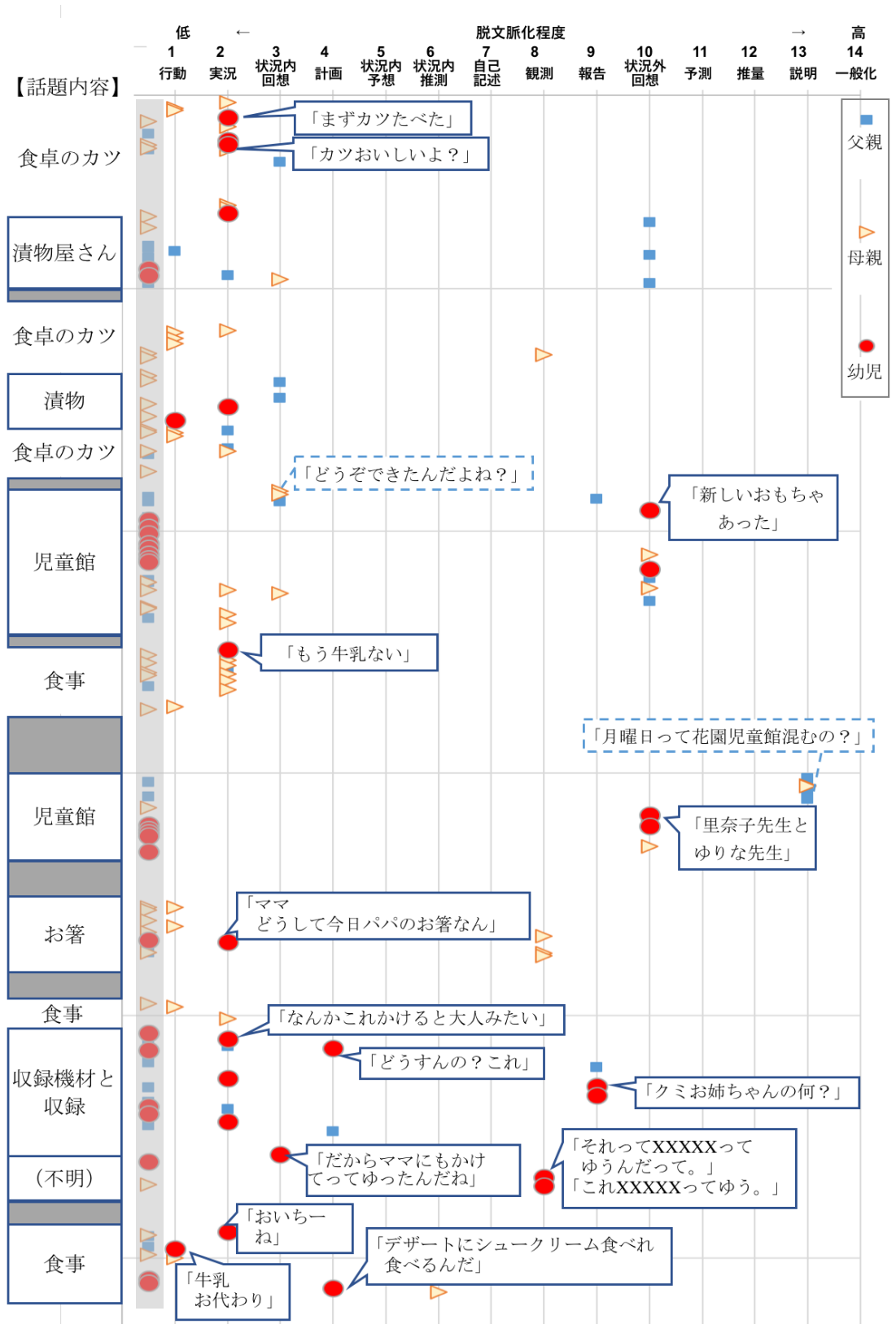


図 5. 修辞機能・脱文脈化程度の展開 (会話冒頭から 10 分程度)



沈黙の後に母親が、昼間児童館に行ってきた時の幼児の様子を(13)「どうぞ できたんだよね?」と幼児に話しかける形で父親に報告し、父親がどこの児童館に行ったか確認している。その後児童は(14)のように、児童館に新しいおもちゃがあったことを述べている。この発話は、「状況外回想」[10]と脱文脈化程度は高い方である。

(13) どうぞできたんだよね?。【命題, 状況内;参加, 過去 → [3]状況内回想】

(14) 新しいおもちゃあった。【命題, 状況外, 過去 → [10]状況外回想】

ここでは両親がその場の食卓とは離れた話題を提供したことで、幼児も脱文脈化程度の高い発話を行う結果となったことがうかがえる。

なお、(14)の「新しいおもちゃあった。」というメッセージは、例えば(15)(16)のように自分のこととして述べることも可能で、その場合には、脱文脈化指数は低くなる。幼児が脱文脈化程度の高い表現を選択して使用したことがわかる。

(15) [作例] (カオちゃんは) 新しいおもちゃを見たよ。【命題, 状況内;参加, 過去 → [3]状況内回想】

(16) [作例] (カオちゃんは) 新しいおもちゃで遊んだよ。【命題, 状況内;参加, 過去 → [3]状況内回想】

その後、両親は、児童館のトイレや排水の整備についての会話をを行い、10秒程度の沈黙の後、幼児は(17)のように新しい話題を持ち出している。

(17) もう牛乳ない。【命題, 状況内;非参加, 現在;非習慣・一時的 → [2]実況】

この(17)で幼児は飲んでいた牛乳がなくなったことを脱文脈化程度の低い「実況」[2]で表現している。この発話は、もっと牛乳を飲みたいということを含意していると考えられる。(17)に対して母親も、「お水あるでしょ?。」「お味噌汁もあるよ?。」と牛乳以外の水分の存在を示すことで、牛乳は追加しないことを含意し、「まだカツしか食べてないよね。」「ご飯食べて?。」と指示が続いている。いずれもその場の食事に関わる脱文脈化程度の低い発話である。

30秒弱の沈黙の後、父親の(18)の質問とそれに対する母親とのやりとりがあり、幼児は(19)で児童館の先生の話を出している。

(18) 月曜日って花園児童館混むの?。【命題, 状況外, 現在;習慣的・恒久 → [13]説明】

(19) 里奈子先生とゆりな先生。【命題, 状況外, 過去 → [10]状況外回想】

(19)は述部が明示されていないが、この後に母親が「ゆりな先生だった?。」と確認する発話をしていることから、(19)の現象定位を「過去」と認定した。ここでも、両親が話している話題がきっかけとなって、その場には存在しない先生について述べる脱文脈化程度の高い発話を幼児が行ったと考えられる。

20秒強の沈黙の後、母親が食事の仕方について指示しているところで、幼児は(20)のように脱文脈化程度の低い表現で質問をしている。

(20) ママ、どうしてきょうパパのお箸な(Uん)。【命題, 状況内;非参加, 現在;非習慣・一時的 → [2]実況】

この質問に対し、母親は、(21)(22)のように、家庭の習慣を述べる、中程度の脱文脈化程度の返答をしているが、幼児はその後沈黙し、何も答えていない。

(21) パパのお箸とかないよ?。【命題, 状況内;非参加, 現在;習慣的・恒久 → [8]観測】

(22) ちはみんなお箸同じ。【命題, 状況内;参加, 現在;習慣的・恒久 → [8]観測】

さらに、20秒弱の沈黙の後、母親からの指示が続き、その後、幼児は、(23)のように、収録機材に関する発話を行い、さらに(24)のように、収録機材を父親がどうするのかについて、会話が行われている時点より先の、未来のことを聞き、親戚のお姉ちゃんのお仕事のお手伝いであることを確認している。

(23) なんかこれかけると大人みたい。【命題, 状況内;参加, 現在;非習慣・一時的 → [2]実況】

(24) どうすんの?。これ。【命題, 状況内;参加, 未来;意図的 → [4]計画】

その後、(25)(26)の発話がある。内容に一部聞き取りが不明なところがあるが、映像から、「それ」「これ」はその場にあるものを指していることが確認でき、中核要素は「状況内;非参加」であると認定できる。また、「それって」と係助詞「って」が用いられ、「～ってゆう」と続いていることから、「XXXXXX」の部分は名前など、そのものの属性や性質を示すものと考え、現象定位を「現在;習慣的・恒久」と認定した。脱文脈化は中程度である。

(25) それって XXXXXX ってゆうんだって。【命題, 状況内;非参加, 現在;習慣的・恒久 → [8]観測】

(26) これ XXXXXX ってゆう。【命題, 状況内;非参加, 現在;習慣的・恒久 → [8]観測】

再度20秒弱の沈黙の後、(27)の発話があり、続いて(28)で、牛乳を要求している。前掲の(17)では「実況」[2]で、もう牛乳がないという状況を述べ、牛乳をもっと飲みたいことを含意していたが、ここでは「行動」[1]で明確に述べている。この要求に対して、母親からは、(29)の拒否と(30)の指示が返答となっている。牛乳のお代わりを拒否された幼児は、(31)のように、デザートという食事の後のことを述べており、時間的にその場とは距離のある「計画」[4]である。

(27) おいちーね。【命題, 状況内;非参加, 現在;非習慣・一時的 → [2]実況】

(28) 牛乳お代わり。【提言 → [1]行動】

(29) ううん。【メッセージの種類が「位置付け」のため、認定対象外】

(30) ご飯を進めて。【提言 → [1]行動】

(31) デザートにシュークリームを食べれ 食べるんだ。【命題, 状況内;参加, 未来;意図的  
→ [4]計画】

図6は、データの後半の4分弱程度の会話部分である。

50秒強の沈黙の後、幼児の「パパ」と父親の「しょっぱい」がほぼ同時に発話され、さらに10秒程度沈黙があった後、幼児の(32)の発話がある。

(32) カオちゃんは枯れてるみたいに見えるけど。【命題, 状況内;参加, 現在;非習慣・一時的  
→ [2]実況】

この発話の中核要素は、「カオちゃんは」で「状況内;参加」と認定した。「カオちゃんはトマトの苗が枯れてるみたいに見える。」のように、「トマトの苗が」が省略されていると考えることもできるため、(33)のように表現することも可能である。その場合でも、修辞機能と脱文脈化程度は(30)と同じである。

(33) [作例] トマトの苗が枯れてるみたい。【命題, 状況内;非参加, 現在;非習慣・一時的  
→ [2]実況】

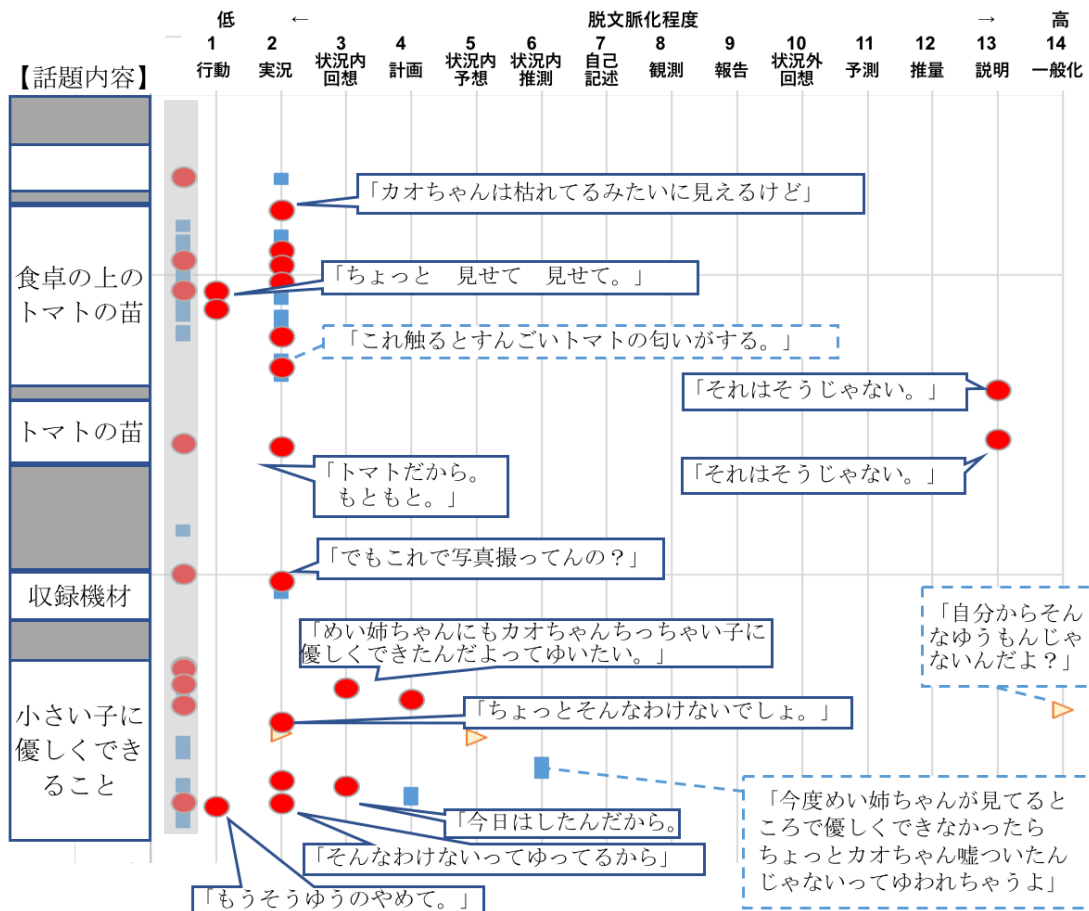


図 6. 修辞機能・脱文脈化程度の展開 (会話後半4分弱程度)

トマトの苗についてしばらくやりとりがあった後に、父親の(34)の発話に対し、幼児は(35)を発話し、15秒程度の沈黙の後もう一度(35)を繰り返して、(36)を続けている。

- (34) これ触るとすごいトマトの匂いがする。【命題, 状況内;非参加, 現在;非習慣・一時的 → [2]実況】  
 (35) それはそうじゃない。【命題, 状況外, 現在;習慣的・恒久 → [13]説明】  
 (36) トマトだから。もともと。【命題, 状況内;非参加, 現在;非習慣・一時的 → [2]実況】

ここで、幼児の(35)の発話は、文字データからは二通りの解釈が考えられるが、音声や映像のやりとりの様子から、「それはそうではない。」の意味ではなく、「それはそうだろう(それは当然だ)。」の意味と判断した。また、この「それ」は、「トマトに触るとすごくトマトの匂いがすること」を指していると考え、中核要素を、その場の状況の中にあるものではなく、概念としてとらえて、「状況外」と認定した。その結果、「説明」[13]と特定された。この発話は、例えば(37)のように、その場の状況の中にある「パパの手」について述べる表現にすることも可能である。その場合には、脱文脈化程度は低くなる。

- (37) [作例] パパの手はトマトの苗に触ったからトマトの匂いなんだよ。【命題, 状況内;非参加, 現在;非習慣・一時的 → [2]実況】

なお、(36)は、(35)を主節とする、理由を述べる従属節と捉えることもできる。その場合には、(36)のメッセージの種類は「意味的従属」と分類されることになり、単独での認定は行わない。しかしここでは、倒置されていることを考慮し、別のメッセージとして、それぞれ認定を行った。

40秒程度の沈黙の後、その場にある収録機材に関して父親とやりとりがあり、さらに25秒程度の沈黙後、(38)の発話を行なっている。これは、「カオちゃんちっちゃんに優しくできたんだよ」という従属節が、「めい姉ちゃんに～ってゆいたい」という主節に埋め込まれた形である。佐野(2011)では「～と言った」「～と思う」などの表現が用いられている場合は、「話し手自身や他者による発話や考えが、発話の中に引用される」ものとして、全体で1メッセージと考え、投射節(「～と言った」など)は、誰の観点から被投射節(従属節部分)の内容を表現しているかを明確にするもので、被投射節についてのみ認定を行うとしている。(38)もそれにならって従属節のみ認定を行うことも可能だが、ここでは、「ゆいたい(言いたい)」という幼児の主張も一つのメッセージととらえ、それぞれに認定を行なった。

- (38) めい姉ちゃんにもカオちゃんちっちゃんに優しくできたんだよ っってゆいたい。  
 【埋め込み節：命題, 状況内;参加, 過去 → [3]状況内回想,  
 主節：命題, 状況内;参加, 未来;意図的 → [4]計画】

この幼児の発話に対して、両親から「自分からそんなゆうもんじゃないんだよ?」「今度めい姉ちゃんが見てるところで優しくできなかつたらちょっとカオちゃん嘘ついたんじゃないってゆわれちゃうよ」という発話があり、幼児は(39)~(42)のように反論し、父親がそれに対して「わかりました。」と返答するところでこの会話データは終了している。

- (39) ちょっとそんなわけないでしょ。【命題, 状況内;参加, 現在;非習慣・一時的 →02. 実況】
- (40) 今日はしたんだから。【命題, 状況内;参加, 過去 → 03.状況内回想】
- (41) そんなわけないってゆってるから。【命題, 状況内;参加, 現在;非習慣・一時的 →02. 実況】
- (42) もうそうゆうのやめて。【提言 → 01.行動】

本研究で分析した親子3人の食事場面会話では、上で流れを追って確認したように、基本的には食事の内容や食べ方に関する発話、収録機材やトマトの苗のように目の前にあるものに言及する発話が多く見られた。食事という場面での日常の会話において、「行動」[1]、「実況」[2]という脱文脈化程度が低いものが日常的であることがうかがえる。

食事場面会話では、食事を摂るという本能的行動が必要なこともあり、会話はとぎれることも多い。本データでも、沈黙が多く見られた。その沈黙の後の幼児の発話は(17)や(20)のように、その修辭機能と脱文脈化程度は「実況」[2]であった。幼児は自分から脱文脈化程度の高い話題を提示することはないことがうかがえる。幼児の発話の脱文脈化程度が高くなったのは(14)や(19)など、両親の話題の提供によって、その結果脱文脈化程度の高い発話をすることがうかがえた。

#### 4. おわりに

本発表では、幼児の家庭での食事の際の親との会話データを対象に、修辭機能と脱文脈化の観点から幼児の発話の検討を行った。食事場面であることから、前半は食卓にあがっている料理の話題や、幼児に対する食べ方の指示の発話が多く、後半は収録機材のことや、食卓のテーブルに置いてあるトマトの苗の話題が続き、いずれも、修辭機能および脱文脈化指数は「行動」[1]、「実況」[2]のように、脱文脈化程度の低いものが多く用いられていた。

その中で、幼児の発話の脱文脈化程度が高くなったのは、両親の発話をきっかけとした児童館のおもちゃについてと、その場にある調査のための収録機材をきっかけとした親戚のお姉さんの話題、その場にあるもの(聞き取り不明)の名前についての言及と思われる部分、および、父親がトマトの苗にさわって「すんごいトマトの匂いがする」と言ったことへの反応であった。3.で述べたように、それらは脱文脈化程度の低い表現を用いることが可能なものもあるが、幼児は脱文脈化程度の高い表現を用いていたことがわかった。

本発表は、修辭機能と脱文脈化程度の観点から幼児の会話の分析を試みるケーススタディの位置付けである。今後、幼児同士の会話、幼児の独話、家庭での食事場面以外の会話など、異なる場面や参与者での分析を行うことによって、幼児の会話における修辭機能と脱文脈化の様相を明らかにしていく予定である。

#### 謝 辞

本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」、科研費基盤(B)(特設分野研究)(18KT0035)、及び科研費基盤(C)(19K00588)によるものです。

文 献

- Cloran, C. (1994) Rhetorical Units and Decontextualisation: an Enquiry into some Relations of Context, Meaning and Grammar. Monographs in Systemic Linguistic Linguistics, No.6. Nottingham: Department of English Studies, University of Nottingham.
- Cloran, C. (1995) Defining and Relating Text Segments: Subject and Theme in Discourse, In R. Hasan and P. Fries (eds) On Subject and Theme: From a Discourse Functional Perspective. Amsterdam: Benjamins.
- Cloran, C. (1999) Contexts for learning. In Christie, F. (ed.) Pedagogy and the Shaping of Consciousness, London: Cassell, 31-65.
- Halliday, M. A. K. and Matthiessen. C.M.I.M. (2004) An Introduction to Functional Grammar (3rd ed.) London: Arnold.
- 岩田純一(1995)『児童の心理学』有斐閣.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉(2019)『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴』言語処理学会第25回年次大会発表論文集, pp.367-370.  
([https://www.anlp.jp/proceedings/annual\\_meeting/2019/pdf\\_dir/P1-16.pdf](https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2019/pdf_dir/P1-16.pdf) よりダウンロード可能)
- 香宗我部琢・千葉留莉・水野佳津子・松延毅 (2015)「食事場面における幼児期の子どもを持つ家族のコミュニケーションの意味」宮城教育大学紀要, 49, pp.161-171.  
(<http://id.nii.ac.jp/1138/00000416/> よりダウンロード可能)
- 小坂美鶴 (2001)「3歳児の仲間同士の会話特徴について：言語使用と発話機能の分析からの検討」聴能言語学研究,18 (3), pp.154-62. DOI:10.11219/jjcomdis1983.18.154
- 佐野大樹 (2010a)「日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1-選択体系機能言語理論(システミック理論)における談話分析-(修辞機能編)」  
[http://researchmap.jp/systemists/資料公開/\(RUAの方法と手順 ver.0.1.1\) 2019/4/11 閲覧](http://researchmap.jp/systemists/資料公開/(RUAの方法と手順ver.0.1.1)2019/4/11閲覧)
- 佐野大樹(2010b)「選択体系機能言語理論を基底とする 特定目的のための作文指導方法について 一修辞ユニットの概念から見たテキストの専門性一」専門日本語教育研究,12, pp.19-26. DOI:10.11448/jtje.12.19
- 佐野大樹・小磯花絵(2011)「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 一「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係一」機能言語学研究, 6, pp.59-81. ([https://www.jasfl.jp/journal/Journal\\_vol6.pdf](https://www.jasfl.jp/journal/Journal_vol6.pdf) からダウンロード可能)
- 高櫻綾子(2008)「遊びのなかで交わされる「ね」発話にみる3歳児の関係性」保育学研究, 46(2), pp.214-224. DOI:10.20617/receej.46.2\_214
- 田中弥生(2018)「児童・生徒作文の日本語修辞ユニット分析と教員評価の検討」言語資源活用ワークショップ発表論文集 3, pp.91-104. DOI: /10.15084/00001641
- 徳永弘子・武川直樹・木村敦(2016)「孤食と共食における食事動作のメカニズム:一食事の形態がもたらす心理的影響との関連に照らして一」日本食生活学会誌, 27(3), pp.167-174. DOI:10.2740/jisdh.27.3\_167
- 森山卓郎・鍋島恵美・斎藤真由美・村田眞里子・樫山ゆかり・小川陽子・高野史朗・光村智香子・田中琢也(2012)「幼児のコミュニケーションと談話標識「じゃあ」」京都教育大学紀要, 120, pp.77-90. (<http://hdl.handle.net/20.500.12176/7633> よりダウンロード可能)